

歌  
舞  
伎  
物  
語

人

越前中納言秀康

土屋左馬助昌雄

(秀康の老臣)

昌雄の子右京昌吉

小姓足羽安居丸

小姓宮井久市

本多伊豆守富正

(秀康の老臣)

速水甲斐守守久

代官大岡十太夫

(實は本多佐渡守正信)

醫師今大路道三

歌舞伎役者出雲お國

同 瓶江

同 名古屋山三郎

同 奴傳介

芝居の座元

土屋の室峰尾

外

場——序幕 伏見城中庭内——返し 男山八幡社頭

二幕目 土屋左馬助の役宅——四條河原阿國の住居

三幕目 京都清水寺舞臺

大詰 伏見城中能舞臺——同 見所——元の舞臺

時——慶長十二年二月より三月。

## 序幕 伏見城中庭内

桃の花盛り、所所に幕を引廻す。(慶長十二年二月八日のこと)庭石に腰を掛けなどしたる武士四人語り合ふ。奥にて囃子の音す。

武士の一 いや各、今日は殿御誕生の祝儀とあつて、我等までへ酒をたまはせられ、その上無禮講の仰せ出し、御兒衆を追驅けて桃の花をかつ散らいたわ。

武士の二 右大臣家から送り越された伊丹の銘酒、飲うで飲うで飲續け、一睡を催して、この敷石に寝まり申したら、誰れやらむ戯たふさ譚を致し居つたよ。

武士の三 は、々、あつたら武士の八幡座へ、紙切を結付けられた辨疏か、我等は生得の下戸なれば、一二杯を下されたら、くるくると腹眩が致いて、侍女衆に水を所望致いたら、なぶらせられて、また冷こいのを飲まされてぢや。

武士の四 我等酒も参る、武邊も仕る、御主には惚切つたが、ただ氣に入らぬは歌舞伎好き、あの囃子の掛聲は、生温こうて腹が苛られる、なでうに歌舞伎を好かせらるるぞ。

武士の一 今に始めぬ偏屈いふぞ、お身染染と見物の致さぬ程に、左様づれの事を仰有るぢや。

武士の二 舞人は聞ゆる出雲の阿國、いかさま天人の影向か、いや天人にあの笑顔はおざらぬ、鶯の聲を出して、山雀に舞ふさまを、好かぬ男は掠鳥ぢや。

武士の三 四條の河原に小屋を建て、芝居とやらの噂は聞いたが、見るは今日が初めて、いかにも顔も美しく、舞の手も一段と見事な者ぢや。

武士の四 各はきつい執心ぢやの、我等女はいかい嫌ぢや、まいてその女づれの、びらし、やらと舞ひひろぐ

のは疎ましいわい。

(大岡十太夫旅装にて出づ。)

十太夫 左馬殿は何れに在すぞ。

武士の一 さいふ御身は何者ぢや。

十太夫 是は是は、某は上りの者、苗字は大岡十太夫、江戸にては輕き役を勤め居れど、もと左馬殿とは

竹馬の友、久久にて對面なしたく、邸へ尋ね参りし所、御城内に出仕と聞き、猶豫のならぬ火急の旅、對面せぬも残念なれば、推して是れへは参つてござる。

武士の一 なに土屋殿に逢ひたいや。

武士の二 御家老はあれにござる。

十太夫 いかにも左馬殿が居らるゝわ。

(十太夫行かむとす。)

武士の三 待たれい、庭先なりとて要害の繩張、

武士の四 是までの推参さへ無遠慮千萬、

武士の一 たとへ土屋殿の知邊なりとも、

武士の二 一寸たりとも御身の土足を、

武士の一 奥の方へ入れさせうか。

十大夫 むむ、いかにも我等が無禮であつた、さらば何卒左馬殿を是れへ御呼寄せ下されたし。

武士の一 左様に仰せあるからは、いかにも土屋殿へ取次致さう。

武士の二 さらば我等が參らう。

十大夫 なにとぞ御申次下されい。

(武士の二下場。直に土屋左馬助を伴ひ来る。左馬助は十大夫の顔を見て驚倒す。)

十大夫 左馬殿御健勝にて珍重に存する。

左馬 貴殿も御無事で祝着に存する。

十大夫 さて今回火急の用事出来、泉州まで罷り越す、久しく御意得申さぬからに、旅掛のまま立寄申した。

武士の一 さては此人は御近付にござりまするか。

左馬 いかにも我等が竹馬の友ぢや。

武士の一 さりとは存ぜず無禮の段、ひとへに御詫つかまつる。

十大夫 我等も無禮を仕つた、御介意下されまいぞ。

(武士等は匆匆に四散す。左馬助は四方を見遣り)

左馬 思ひがけぬ本多殿、御先觸もなく、かつは怪しき姿にて、御發向は心得ぬ、先づ御奥へ御通り下さるべし。

十太夫 左馬にも似合はぬこと、人目を忍び某が、輕輩の名を假りて、都へ登り参りしは、外ならぬ天下の爲、恐れ多くも大御所より、御身への密使に擇ばれた。

左馬 詭意とあらば猶のこと、せめて是れへ。

(石上へと招く。十太夫は依然として)

十太夫 いやいや何處までも人目は代官の十太夫。

左馬 いかさま怪しめられては詮なきこと、さらば其儘にて、

十太夫 いかにも詭意を聞かせ申さう。

左馬 はあ。

十太夫 先づ第一に問ひたきは、大御所の仰せとあらば、如何なる難事も勤めやうかの。

左馬 事新しき仰せかな、もと某は甲州生れ、大御所の御引立にて、斯様の身には罷りなる、今更の御問は、恐れながら御恨みに存じ奉る。

十太夫 存じ居るであらうな、  
むむ、然らば御邊、秀康公へ附家老とならるとき、大御所より仰せありたる一は、定めて、

左馬 骨に刻みし御戒め、いかで忘却致すべき。

十大夫 天下の爲とあるからは、主の頭も取るべきぢやとありし仰せを何と聞きつる。

左馬 なんと。

(雛子に太鼓の刻み頭。)

十大夫 いま大阪には右府秀頼、父太閤の跡を守り、生年の後には天下の心あり、豊臣恩顧の大小名たち

大御所御存命のうちこそ、表に歸服の様をも見すれ、御他界あらば天下の大變、根差を固めぬそのうちに、悪木は切つて退くべし、さるに秀康公、一旦太閤の猶子とならせられたる義を思ひ、兎角に豊臣を虜負せられ、大事あらば秀頼公と一つになり、采取らむなごと口遊まる、この君世にあらむ程は、天下の事成り難し、小を捨て大を取るが世の順義、汝に逆事をすすめ申すぢや。

左馬 驚き入たる御仰せ、いかにも殿が口ずさみには秀頼公とは兄弟なり御力にならむなごとは承はれど、大御所と大阪方と、干戈を交ふるその中に、いかでか御父君に背かせ給ふべき、その御掛念は御無用なるべし。

十大夫 我等もさありて欲しいと念じ居るぢや、さるにの、越前殿の御心には、徳川の天下を望みたまはぬのぢや。

左馬 とはまた如何なる證あつて。



十太夫

知らるる通り若御所は、越前殿には弟ぢや、兄としてその采を受くること、心外なりとは思召す  
らめ、既に大御所と御對顔の節にも、大阪に大事あれば、餘人は知らず、我一人は味方ぞと、廣言  
ありしと承はる、斯の如くば徳川の、天下に仇は越前殿、兼ての仰は今この時ぞ。

(懷中より藥包を取出し)

十太夫

これを參らせられい。

左馬

容易ならざる一大事、御仰せとはいひながら、御連枝の命を縮むる大逆、

十太夫

涙を吞んで御使に立つた佐渡が心中、

左馬

御藥を預かる土屋が心根、

十太夫

昌雄、

左馬

佐渡殿。

(佐渡、左馬助と共に嘆息す。折から囃子はキリに近づき、「やんやんや」と口口の賞め詞聞ゆ。)

左馬

人の來らば大事となるべし、見知の者も候ふべきに、あの植込の後方にあたり、いふせき小屋の  
候へば、暮るを待ちて立たせたまへ。

十太夫

我は是れより大阪へ立越え、伊賀を過ぎりて歸るべし、ゆめ大御所の仰せばし、背かせたまふ事  
あらば我が面目も今日を限りぞ。

左 馬 是非に及ばぬ、殿御落命の其夕、死出の山路に待受けて、この御託を申上げるわ。

十太夫 逆縁ながら弔ひは、拙者が營み申さうぞ。

左 馬 いや弔ひより御公達を、確と御頼み申すぞや。

十太夫 念に及ばぬ。また御邊の後も、

左 馬 なに某が名跡！ 主を害ふ我等が行末、その御配慮は辭退申す。

十太夫 萬事は拙者が胸中。

(十太夫下場。左馬續きて去らむとす。あなたより歌舞伎芝居のワキ役者名古屋山三郎、風流なる扮装、十太夫と引違へて上場。)

山 三 御家老様。

左 馬 そちや役者の山三郎か。

山 三 御召に依り參上の山三郎奴にござりまする。

左 馬 けふは大儀であつた。

山 三 はあ。

(奥にて謠の聲聞ゆ。殿前中納言秀康、土屋右京、足羽安居丸、宮井久市、太刀持の小姓、外に近侍を従へて上場。)

秀康

諺「遙かに人家を見て花あれば即ち入る」ははははは、左馬これにお居やつたか。

左馬

今日の御催し、天氣もまことに美はしく、是れしかしながら我君の、御武連長久の感應、左馬恐  
悦に存じ奉る。

秀康

いかな英雄豪傑とて、儘にならぬは天氣と戀の道ぢやてな、麗かの天氣、身に取つては大満足ぢ  
やわい。

山三

御殿様、御機嫌宜しうござりまするな。

秀康

山三、けふは一段と面白かつた、常の猿樂と事かはり、差手引手も鮮かに、近頃渡來の三味線の  
色音、いや腸をかきむしるわい。

山三

殿様ひかせられまするで、歌舞伎の役者一同に、肩の身幅が廣うおじやりまする。

秀康

我等が見物するが嬉しいとか。

山三

御意ござりまする。

秀康

國呼べ。

山三

はつ。

(山三下場。)

秀康

牀几持て。

(小姓牀几を持參し「御牀几」と呼ぶ。秀康これに倚る。向ふより侍一人登場。)

侍 左馬殿まで申上ます大阪の御使者速水甲斐殿、お暇に出でられました。

左馬 なに甲斐殿が暇乞とか、さらば廣間にて御對面申さう。

秀康 甲斐が戻るとか、外ならぬ一家の使者苦しうない、是へ呼べ。

左馬 はあ。

(左馬頭にて差圖を爲す。侍は承はりて退出。間も無く速水甲斐守守久登場。)

甲斐 中納言家には是れに御入候ひしか。

秀康 甲斐、遠方大儀であつたな。

甲斐 御手厚き御待遇に預り、忝けなう存じ奉る。日も西山に傾けば、最早御暇仕りまする。

秀康 右府へ宜しう傳へくれい、右京船場まで見送致せ。

右京 はあ。

(右京立つて甲斐の傍に来て日禮し、甲斐を導き去る。)

左馬 我君右大臣家へ御會釋はさることながら、當時大御所の御代官として、當城を預り居らるるから

は、あまり御近しきは如何な者と存じ候。

秀康 其方は時折異なる事を申すの、我かつて大閤の養子となり、その一字をとりて秀康と名のる、大阪

城の主は我が爲には弟ぢや。

左馬

仰はさることに候へども、江戸表なる將軍家も、また御弟におはします、表は和平を装へど心の刃に砥を合はず、怪しき沙汰の取取なるに、御謹なき時は、不測の禍生すべきか。

秀康

天道は正しきを助く、秀忠も秀頼も、兩人ながら弟なれば、何れを何れと隔てを付けう。

左馬

とはいへ肉親の御父兄弟。  
諄く申すな、兄を差置き弟を、大將軍に立てたまひし父上へは、親に別れし孱弱い秀頼、大事のあらばこの秀康は、轡を並べ死生を共に爲すべしと、豫め申置いたわ。

左馬

それまでに御意あるか。

秀康

秀康は義を忘れ得ぬ。また肉親の親兄にも、左様の譏りを受けさせ得ぬわい。

左馬

有難き御意、畏りたてまつる。  
左馬、落涙致したな。

左馬

はあ。  
(向ふより名古屋を先きに、出雲阿國、同舞子瓶江登場。こなたよりは近侍服紗にて掩ひたる臺艦を持ちて目立たぬ様に秀康の後方に控へ居る。)

山三

御殿様はあれにおはします。

お國 お召とは何の御用であらう。

山三 まづまづ御座れい。

(三人遙か下りて平伏す。)

秀康 おう、國か、けふは一段と見事であつたぞ。

お國 有難い御言葉、國身にとりまして冥加に餘りまする。

秀康 とりわけて西王母は面白う見た。

お國 そのお言葉に付きまして、異な事を伺ひまする様ながら、拙き舞の中央にて涙を浮めさせたまひ

しは、如何なる御心にては候ひしぞ、西王母の一曲は度度奏で候へども涙を見たるは始めの終り、あはれ障けも在しませば、其道の心得草にもなり候はむ、御物語を願ひ奉りまする。

秀康 こは思も掛けぬ事が目に入つたな、恐らく近侍も知らざる涙を、謠ひつ舞ひつの其中に、見留め  
えたる賢さは、誠に人の褒美もうべ、希代の名譽かな、幼きより秀康は、二人の父が弓矢を習ひ、少  
しは人に知られたれども、未だ天下の一人たらざるに、國こそ果報のもの、舞の手業は日本一人、  
女だてらに天下一の、響を雲の上までも輝かしたる羨ましき、我身に較べて身は泣いたぢや。

お國 有難や有難や、その御詞は三千歳に、花咲き實りし桃實より、國の爲には嬉しき賜物。

(秀康は近侍の手より珊瑚の珠數を受けとり)

秀康 言葉のみには止めまじ、其方が掛けたる水晶の数珠、ありや装束と映りが悪い、粗末ながらこの

品は、晴れの軍に其が、襟にかけたる記念のもの、けふの當座にこれを取らさう。

お國 有難う存じまする。

秀康 國、其方は何歳になる。

お國 いつつ程にござりまする。

秀康 二十五歳か、よき婿人<sup>むこがね</sup>を推擧しやうか。

お國 國は生涯不犯に暮らしまする。

秀康 きつい事ぢやの。

お國 出雲の神に祈誓をかけ、歌舞伎を良人と定めました。

(秀康掌を打ち)

秀康 ゆゆしし、ゆゆしし、さる心組が誰にも欲しい、瓶江そちもさうか。

(瓶江耻かしさうに差俯く。)

お國 これなる山三が定まる夫にござりまする。

秀康 逸早い事をしたな、瓶江美男を持つと、心掛りな者ぢやぞ。

(右京登場。)

右京 御使者は今の程お立にござりまする。

(折から風激しく吹き来る。秀康空を案じ)

秀康 暮合近く吹く風に、大阪さして行く舟の、いづこに宿を定むらむ。

右京 仰せの通り速水殿は、今宵は船中にて明かさせらるる事なるべし。

山三 なに舟がかりを爲されまするか。

秀康 甲斐に用でもあるか。

山三 え、何しに私ごときが。

(山三平伏す。秀康は山三を見て少し考へる氣味合)

秀康 誠や天は偽りなし、春來つては桃山の、花は變らぬ昔にはある。

お國 人の巧は人を限る、一期を舞に明暮らすも、花の臺の一片ひとひらにあらむ。

左馬 その花片は美はしき、しるしを年に残すべし、心無けなる庭造の、枝を撓めて仇花を、散らすを

何と御覽する。

山三 花の鬘を翳すべく、また桃實をみのらすべく、二道かけて迷ふこそ、心落居ぬ姿なり。

瓶江 闇なき戀路を渡り行けば、光明天の音楽の、遠くに響くを聞きたまはでや。

右京 君の情の厚ければ花に不斷の香ありと、酔ひ心地の致し候。



秀 康

境界は人にあり、汝の幸は人の禍、わが望は人によからじ、行先は暗に似たり、唯唯日の出づるを待たむ。

(風また過ぐ。張り渡したる幕を吹き捲く。)

## 返 し 男山八幡社頭

風激し。(その夜)正面なる石段を下り來れる名古屋山三は、中段に止りて四邊の様を伺ふ。此方よりは歌舞伎の一座奴傳介、速見甲斐を導きて登場。傳介口笛を吹く。山三膝拍子を打ちつつ段を下る。)

傳 介 山三様、

山 三 かの手紙は、

傳 介 お届け申した所、速水様御入來にごわかります。

山 三 なに速水様の御出とか。

甲斐 名古屋、甲斐でおりやる。

山三 誠に甲斐殿、何から申上げやうやら。(傳介に向ひ) 其方は社前へ参り、太夫と瓶江とがこれへ來らぬ様に引留めてくれよ。

傳介 畏つた。

(傳介は石段を登りて去る。)

山三 さて甲斐殿、以前は以前、今は歌舞伎ものと成下りたる山三郎、晝の御見を幸に申上げたき一部始終御聞下されたし。

甲斐 珍らしき對顔、あたり武士を捨てたる上、面を河原に曝す山三が、速水への用事とは何。

山三 はは、ふと世相を觀じ、狂言綺語に身を任せし名古屋の心中は、ただ名古屋が知るばかり。それはさて、以前は豊臣が祿を食みたる山三郎、けふ此頃の大阪城の御有様、何ぞお爲めの事あらば、御耳に入れむと思ふ矢先、けふ伏見の城内にて、徳川家の軍師と聞えし本多佐渡殿、家老の左馬助と密談の果、薬包みと覺しき物を、手渡なして小蔭に忍ぶ。ちらと見たるは某一人、にはかの風に舟繋りと聞いて即座にお知らせ申す。

甲斐 異なる話かな、かの佐渡守は大御所の懐刀と名代の大<sup>おと</sup>臣、只一人にて庭蔭へ、忍び入りしなんぞとは、誠にからぬ珍説なり。

山三 珍説故にお知らせ申す。主も祿も無い名古屋なれども、越鳥は南枝に巢をくふ、豊臣家の爲には尤も頼みに思し召さるる越前家、その御身には心掛りの薬包、御油断のなさらぬ様、御身様より消息なりと、御遣しは下さるまいか。

甲斐 御身が見たると云ふばかりにて、正しき證も無き事を、他家の我等が何として、申入れがならうぞ。

山三 さ、それ故にこそ御頼み申す、外に證のある事ならば、山三が直に申上げる。

甲斐 いかさま。

(甲斐一考す。)

山三 ただ何となう、左馬助に御油断なされなとだけにて。

甲斐 さりとて家老の左馬助殿に、怪しき沙汰ありなるとも、憚りありて申されまい、歸阪の上にて片桐殿へ、此分の耳打だけを致し申さう。

山三 すりや御消息は、

甲斐 得書き申さぬ。

山三 さて是非もない。

(兩人わかれる。速水は歸らむとし、山三は元の段を上らむとす。十太夫の佐渡守上場、速水と摺違ふ。速

水刀の鑿を執る。十太夫振りほどきて行かむとす。阿國、瓶江段を下り來るを、傳介追ひ來り、瓶江の袖を引く。阿國急ぎて段を下り山三に突當る。山三段を飛下りて甲斐と十太夫の間に搦む。十太夫は元來し道に歸らむとす。折から甲斐の下人提灯を持つて登場、十太夫を甲斐と誤認し、「お迎ひ」と叫んで鼻先へ火を出す。十太夫提灯を拂ひ落して、逃れ行く。甲斐は「正しく」と氣込む。

幕

## 二幕目 城内土屋左馬助役宅

左馬助住居の裏座敷、本家へ續きたる壁に窓あり、下手には枝折戸立つ。下部藤内庭に水を打つ。腰元の小染は縁の上に佇む。(同じ年三月の初)

藤内 此頃はいつにない御不機嫌ぢやの。

小染 清水御參詣の御供もなく、朝から澁面つくつて在しやりますわ。

藤内 奴も御出仕のお供が出来ぬで、肩身がちくとばかり狹まり申すぢや。

歌舞伎物語

小染 奥様がお可哀相ぢや毎日毎日お叱りばかりで、傍の者もはらはらものぢやの。

藤内 何んでも御心配事があるのぢやろ。

小染 お上の機嫌が悪いのは御奉公の者には心掛りでおさるのう。

(土屋右京昌吉、枝折戸を開きて入り来る。)

右京 藤内か。

藤内 和子様、いつにない早い御歸りにごわかりますな。

右京 父上は何れに在らず。

小染 頼うだ方は御奥に居られまする。

右京 左様か。

(奥の方にて)

左馬 右京の聲が致す。

(上手の小窓を開きて、左馬助は庭先を見やり)

左馬 悴、いかが致した。

右京 はつ、兼て仰出されましたる清水御參詣の門出ながら、御病氣と承はり、馳脱けて御見舞に参り

ました。

左馬 心弱い奴、君前へ出仕なしては、親ありと思ふなと、兼ての言葉を何と聞く。

右京 仰には候へども、御所の都合にて昨日も歸宅致しませねば、御用の間を缺かざる様、朋輩衆に頼み

合せて……………

左馬 その小才覺措け、武士は唯直ぐにあれ、はや戻れ。

右京 はあ。

(右京立つて行かむとす、左馬助屈托の顔なりしが、膝を打ち)

左馬 やれ待て悴、座敷に直れ我等もそれへ参らうぞ。

(右京座敷へ上る。左馬助も出で來り)

左馬 腰元は奥へ行け、藤内は庭外へ出でい。

(兩人下場、左馬助座に着く。)

右京 父上、何御用におざりまするな。

(左馬助は物をも云はず。)

右京 父上、父上。

左馬 右京、前以て問ふ事あり、主君と親とは何れが重いな。

右京 若年者の拙者、忠孝の道は心得ませねど、兼兼の御教訓とて、憚りながら御主君を一際深く存じ

居ます。

左馬 よし、よし、さて御主君と申すは誰ぢやの。

右京 御戯れも事によれ、中納言様の外に御主君がござりませうや。

左馬 駿府に在する大御所様は何に當るの。

右京 中納言様の御爺様ぢやろ。

左馬 大御所様と中納言様とは何れが重かるぞ。

右京 御親子の御中、中納言様への忠義は、即ち大御所様への忠義、隔てあるべき筈はありませぬ、父

上の御言葉は、何とも合點が参りませぬ。

(左馬物をも云はず右京に切掛る。右京は切付くる父の肘を抑へしが手を引きてまたも切込む太刀風に、縁より下に飛下りたり。)

右京 こは何となされます。

左馬 見い親子とてこの通りぢや。(小聲になり)彼方と此方が斯の様なりや何とするぞ。

右京 思ひ掛なき事共ばかり。

左馬 その仔細語らう程にこれへ参れ。

(左馬助刀を收む。右京元の座へ直る。)

左馬

若年者の其方とて、少しは天下の様は知るらむ、關が原の合戦以後、次第にひろがる徳川の、流れの末は太かれども、その源の大御所様は、寄る年波に争はれぬ、頼の刻みの深き御身、萬一の事もあらば、天下の動亂はかりがたし。かかる折には第一番に企を爲さむもの、豊臣家の外になし、故太閤殿下の恩顧を蒙りし大小名達、大御所に恐れをなし、表は當家に歸服なせども、御他界あらばいかなるべき。これ大亂の基なるに、淺ましや御主君には、御舍弟たる江戸殿に、御家を嗣がれし御腹立、または太閤殿下が一端の恩義を忘れたまはず、常常の御言葉にも、大阪に珍事あらば、秀頼と共に采取るべしと申させたまふ。されば徳川の天下に禍をなしたまはむは當殿にこそまますべけれ。

右京

こは仰せにて候へども、天下はもと豊臣家のもの、暫くは當家にて、御後見を申せども、やがて秀頼公御成人の其後は、返させらるる筈なりと、假初の御口ずさみにも、我等まで申聞けさせたまひ候。

左馬

その御言葉を何と思ふぞ。肉親の御子さへ、かかる思を懐かせらるるに、ましてや外様の大名達時來らばと思ふもありなむ。近頃大阪にては、諸國の名ある浪人を召抱ふる事の頻りなるに、所存の程は知られたり、天下を争ふ大軍は、女儀を大將の大阪方、憂ふべきにもあらざれど、御主君まことに豊臣の采とりなば、日本一のゆゆしき御敵。



右京

兼て大御所様の御仰せにも、我子ながら秀康は剛の者にてありけり、故太閤と我等とが、名乗の文字を合せたれば、武勇も二人を受けつきたりと、賞美ありしと承はる。

左馬

さればこそ我等の苦衷、勿體なの事ながら、天下の爲めに御主君の、御命を縮めうと企てたわ。

右京

え。

左馬

悴、そちの一命を天下の爲めに贅に捧げい。

右京

すりや現在の御主君ぞ。

左馬

忠義を教へし親の口から、大逆罪を勧めるわいやい。

右京

さればとて、御情厚い御主君様。

左馬

天下の爲めぢや、たつて勤めい、我も思ひは變はらうか、忍び難きを敢てなすも偏に天下の爲にして、私にあらざる證は、土屋の家もこれを限り、この企の成就の日は、汝も死ぬ、我等も共に途の河邊で、存分お詫を申上げる。

右京

事を分けたる御仰せ、この天罰にて八大地獄の、責苦を永永受けやうとて、

左馬

役目をきつと勤めうとか、

右京

はあ。

(枝折戸の外より)

藤内 若様、殿様御門を御出ましにごわりまする。

右京 心得た、直様參ると申せ。

藤内 ねい。

(藤内下場。)

右京 さらば父上御殿申上まする。

左馬 待て悴、容易う請合ふた大事、何として仕終するぞ。

右京 恐れながら御寢首を。

左馬 いやいや、武勇絶倫の我君、そちの脊腕にていかでいかで、かつうは他家への聞えもあり、幸なるかな今日の御參詣、御茶など參る際に、取混て差上げい。

(左馬助懷中より包紙を出して右京に渡す。)

右京 とはまた、あまりに急なること。

左馬 かかる大事を胸に抱けば、立居にそれと知られなむ、御目に留まらば天下の大變、佛の場にて殺害の、罪過を犯すは恐れなれど、

右京 後世を捨てたる某には、恐ろしとも思ひ申さず。

左馬 犬畜生にも劣つたる、二人はこれが一世の名残、來世は焦熱大焦熱の、火炎の中にて對面致さう。

右京 親子は一世と云ひながら、共に地獄に沈みたらば、煙の間より御顔を、拜むがせめての頼みなるらむ。

左馬 人に誇られ、名を下し、最愛の子を捨て、家を断ち、あらぬ事をば爲せうぢやまで。

右京 父上、

左馬 右京、

右京 浅ましい事ぢや。

(右京父の手を取りて泣く。ややあつて左馬助手を叩く。小染出づ。)

左馬 奥方へ是へと申せ。

(小染下場。)

右京 なに母上を。

左馬 今生の名残ぢや、氣取られぬやう、一目逢うて行け。

(左馬助の宰峯尾登場。)

峯尾 なに右京が歸りやつたか。

左馬 清水参詣の御供先を駈抜けまして参りました。

峯尾 それは、ようぞ参られた。

右京 御用談に陳取ましたれば、御供に遅れやうも知れず、はや御暇を申しまする。

峯尾 御前を能う勤めや、朋輩衆と喧嘩なぞしやんなや。

右京 畏りました。

(右京兩親に暇乞して下場。)

峯尾 我子ながら利發のもの、今歳を過ぎば御前を下げ、可愛らしい嫁御寮を、迎へねばならぬわいの。

左馬 (沈みたる聲調にて) その嫁御寮には誰がなる。

峯尾 はてこちらの右京が婚風なりや、天からも地からも、降つて湧く程あらうず。

左馬 天に飛ぶか、地に入るか。

峯尾 こりや何を仰せあるやら。

左馬 右京には妻の沙汰より、極樂世界に住居する。

峯尾 え。

左馬 いや天人よりも勝れたるを、嫁女に申受けうわい。

——舞臺廻る——

## 四條河原阿國住居

風流なる座敷、床に珊瑚の數珠を飾る。歌舞伎芝居の座元、奴傳介と物語る。

座元 傳介殿、太夫の機嫌はどうぢやの。

傳介 見た所は變りも無い様子ぢやがの、氣分が悪いとて寝たり起きたり、風吹き鳥を正のものぢや。

座元 はて、それは困つたもの、芝居も當分休まずばなるまい。

傳介 今度出した「東下り」の噂は、清水の舞臺より高いに、見物は三十三間堂の佛様より概分に來られるに、折惡るい太夫の不加減、えい事は二つおりのないわ。

座元 早う舞臺へ上れるやう、介抱を頼むぞよ。

傳介 われらは一日小屋に出ぬと、身體が悪うなる程に、舞臺に精を出いても、見物が好からぬぢやて。

座元 さらば御暇を申す。

(座元下場。奥より瓶江登場。)

瓶江 傳どの。

傳介 若太夫。

瓶江 座元は歸られたの。

傳介 山三はまだ來ぬかの。

瓶江 ええまた阿呆らしい、いつ山殿の事を尋ねました。

傳介 はて、つい今の先き。

瓶江 そりや誰れが。

傳介 はて、あなたが。

瓶江 あの何處で。

傳介 あのここで。

瓶江 措かしやりませ、いつもいつも、好う諱ける人ぢやの。

傳介 面妖な、お尋ねなされた返答が、御意に叶はぬとか。

瓶江 誰れも聞きはせぬと云ふに。

傳介 白癩！ 山三様に頼まれたお言傳も聞かしやれぬとか。

瓶江 なに、御言傳。

傳介 いえ、なに物でござるぢやて。

(折から名古屋山三郎登場、戸外にありてその趣きを立聞きます。)

瓶江 お言傳とは何用ぢや。

傳介 そのお言傳はな、太夫の病氣で芝居は休みなり、鬱散晴しに花見はいかが、さあれば御身とたつ

た二人、連理の木では動けぬが、比翼の鳥なら飛んで行かれう、と思ふがどうあると仰有れたは。

瓶江 なに山三様と二人で花見。

傳介 我等を差置き、あまりといへば酷いお頼み、ちくとばかり腹も立つたが、悋氣と痴氣は年寄の謹み處、ぐつと我慢しての言葉ぢや。

瓶江 何を措いても参りたうはおざれども、引籠り中の太夫の手前、まづ見合せにしませうわいの。

傳介 これはいかな事、若太夫には戀路の闇を、紙燭して歩まれると見えまするけな。

(山三後方より)

山三 偽りの影がさいたぞ。

傳介 や。

山三 花見にはいつ行くのぢや。

傳介 あの、それは明日、いや昨日。

山三 氣分の悪い太夫に隠れて、身共が花見に参るのぢやまで。

傳介　あの、それは物ぢや。

山三　ものとは。

傳介　はて怖ものぢや。

(傳介下場)

瓶江　山三様花見とは虚かいな。

山三　病みたる人を宿に残し、何しに花見に参らうぞ、傳介が其方を擔いだのぢや。

瓶江　ええ憎らしや。

山三　は、は、は、は、は。

瓶江　ほ、ほ、ほ、ほ。

(外より小鼓の音聞こゆ)

山三　太夫か。

瓶江　今が庭におちやつたが。

山三　河原を漫歩きでがなあらう。

瓶江　もうし山三様、河原へ出て見やうではありませぬか。

山三　せめては花を遠に見やうか。



(瓶江、山三と共に下場、阿國小鼓を手にして登場、力無げに柱に凭り、鼓をとりて調子を試む、意に満たずして捨つ。)

阿國

結ほるる心の闇が戀ならば、わが思ひこそさにはありけれ、懐かしいは戀の下崩、頼もしいは戀慕の始、煙絶えにし富士が根も、昔は燃えし山と聞け、奥また奥に潛みにし、戀の火焰が立のほるか。

(床の間にある珊瑚の數珠をとりて頬に摩りつけ)

阿國

はかなき生れを歌舞伎の神へ、捧けし誓は忘れねど、人戀しさも忘れ得ぬ、二十五年の生涯に、この賜物に觸るる時のみ、男の香色の身には染め、あらかなつかしの面影。

(數珠を恍惚としてながむ。傳介登場。)

傳介

太夫様。

阿國

あい。

傳介

まだ氣分は癒らぬかいの。

阿國

ここと云つて悪い所もおざりませぬが、まだ立つ氣にはなれませぬ。

傳介

いまでも芝居の座元が來て、案じて居られたわい。

阿國

氣の毒でおりやるの。

傳介

何にせい、東下りが大評判ぢやに、シテの太夫が休まれたで、芝居も立たず役者も立たず、装束の衣裳着けたまま舞臺で倒られた時には、傳介も肝を潰しましたのぢや。

阿國

我身ながらも不思議のやうであつたわいの。

(山三、瓶江と共に登場)

阿國

山三殿か。

(傳介瓶江を見て)

傳介

や、これは。

瓶江

傳介の、此方は憎らしやの。

傳介

ひたに通り通り。

阿國

また瓶江を構はれたのぢやな、謹けた人ではある。

傳介

首尾よう謀りまいたを、山三殿入來で、桶の箒が遊ね申したわい。

山三

時に太夫、氣分はまだ癒らぬかいの。

阿國

まだ何となく心が鬱結れ、切りなく涙が零れてならぬぞや。

山三

さして身體に障りなく心が浮かす涙が乾かぬ、こりやてつきり戀の道ぢや。

阿國

え。

山三 瓶江殿、傳介と一緒に座を外して下され。

瓶江 あい。

(瓶江、傳介と共に下場。)

山三 何をお隠しなさるるぢや、醫師ならねど某は、病の因を能う知つてぢや。

阿國 病氣の因を知つたとは。

山三 はて活達の氣にも似ぬ、病の圖星は越前様ぢや。

阿國 や。

山三 戀は捨てたと名乗らるる誓文に臆されてか、片時も放さぬその數珠でも、大略は知れてある。

阿國 山三殿、今は隠さぬ隠されぬ、色にぞ出づる亂れ戀、頼もしい、なつかしい、思を戀と名くるとは、今になつて身に知られた。

山三 さすがは太夫、よう隠さずおつしやつた。したが斯様に舞臺を引き、引籠つては埒が明くまい、こりや日頃にも似合しからぬ。

阿國 さいふて、應ふ戀でなし。

山三 隔ての無いが戀のならひ、まいて太夫は天下、舞にかけたら古今の上手、勝らうとも劣りはない。

阿國 お身は左様にお云ひあれど、そりや此方だけの口といふもの、飛ぶ鳥落す殿様と、河原で立舞ふ傀

備の太夫。

山三 云はれな太夫、我れと我身を卑下したとて、思が成らうものでなし、そのうち御召が度重なれば。

阿國 神の御前で乙女で暮らそと、誓つた言葉は反古にはならぬ。

山三 己れで立てた誓文なら、己れで破ると支はあるまい。

(阿國鼓をとりて一つつ打ち)

阿國 我身が打つた音ではあれど、もう鼓へは返らぬわいの。

(阿國涙ぐむ。外にて傳介の聲。)

傳介 山三様、入つてもようおぢやるか。

山三 こちへござれ。

(傳介上場。)

傳介 山三様、武家の飛脚が見えられて是非是非逢ひたいと申されてぢや。

山三 なに某に逢ひたいと。

傳介 大阪からの使者ぢやと申す。

山三 何にもせよ、對面致さう。

傳介 さらばおざれ。

(傳介山三と共に下場。阿國思ふとなしに四邊を見遣りつつあり。瓶江登場。)

瓶江 阿國さま、阿國さま。

阿國 なんぢやのう。

瓶江 今がた表を越前様がお通りぢや。

阿國 越前様が。

瓶江 清水へ御花見に御出やるさうな。

阿國 そりや何時。

瓶江 つい今がた。

阿國 なぜに知らさぬ。

瓶江 大夫に別に知らせる事でも。

阿國 ほんにさうよの。

(阿國萎れる。山三立出で)

山三 なに越前家が清水御参詣とか。

瓶江 あいのう。

山三 幸ひ。

(山三手にせる書狀を懷中に收む。)

—幕—

### 三幕目 京都清水寺舞臺

花に包まれたる清水寺の舞臺、老若の僧は掃除を終りたり。(前幕と同じ日のこと)

老僧 雲水よ、花が咲くと煩さいのう。

若僧 空煙老はまた愚痴を始めた。

老僧 いや、いや、然でおりない、朝は朝で、曉の花が好いとて夥しい人出がする、夕はまた入相の鐘に散るさまの、こよなう美はしいとて、莫大もない群集ちや、その上日中は花見衣、貴賤混雜の忙しなさは、別物ちや。

若僧 はて、それが何のうるさい、日日の佛弄り、線香には燻される、抹香には染みはてる、ほんに坊主が嫌やの嫌やの。

老僧 花が咲いたとて何面白かろ、散る花を清めるので、箒持つ手がいと辛度ちや。

若僧 花が散るので戀が削れる、青葉になつては禮盤と、また首引で暮らすのだから。

老僧 うつらうつらと寝たら格別、春と申すは騒騒しいだけの者ぢや。

若僧 けふは越前様の御花見とて、暫が間は誰人なりとも、参詣を止めた故、いつにない静な事ぢや。

老僧 毎日毎夜この通りぢやと、樂寢が出来て嬉しいの。

若僧 また骨惜みが始まつたな、もう一息ぢや、早う掃除を致さうぞ。

(二人奥の方へ入る。名古屋山三登場。)

山三 大阪からの御書状を、お預りは致したが、人傳にはならぬ文、折から當寺へ御参詣とは天の與へ、何とかして御手渡を致さうぞ。

(以前の僧出で來り、山三を見て)

老僧 こりやその方、暫時の間御参詣は叶ひませぬぞ、さあさあ御堂の外へ出られませ。

山三 大慈大悲の觀世音菩薩、誓にしばし拜ませられい。

若僧 いやならぬわ、菩薩よりなほ御威光強い、伏見の越前様の御参詣で、舞臺中は御花見の座敷ぢやてや。

山三 さう聞けば猶の事ぢや、貴賤を擇まぬは花の習、伏見の殿とて御叱りはおざるまいて、ははははは。

老僧 笑ひ居るわ、越前様はどうあらうと、

若僧 師匠の坊に叱らるる、

老僧 とつとと出やしやれ。

若僧 さあさあお出やれ。

山三 すりや是程に申しても。

(響蹕の聲遠くより聞ゆ。僧は之を聞きてなほ慌て)

老僧 早う出やれ。

(兩人にて山三を拉して推し出す。山三争はむとせしが、思返して僧と共に下場。越前中納言秀康、足羽安居丸、宮井久市、外近侍數名登場。)

秀康 けにや梢も埋もるる、花の榮華は今を極み、天地も人も酔ひ心地、まことや自然は律義なるかな、

人待たねども花は笑めり、正直は勇の本體、あら勇ましの花の姿や。

安居丸 幸ひけふは長閑にて、天も守るか花の道行、

久市 霞の暮は空にかかり、盛りを散す風を厭ひ、

近侍の一 春の盛をここに集めて、

同の二 殿の御成を待顔なる、

同の三 清水寺の花の場。

(一同着座。)



秀康

誰そ茶を持て。

安居丸

はあ。

右京

(安居丸奥の方へ入る。土屋右京登場、秀康の前に跪き)

御供揃の其間と、暫時の御暇たまはりて、私宅へ罷り歸りし處、思の外に手間取り、延引致しましたる段、眞平御許容下されたし。

秀康

して左馬の病氣は。

右京

次第に快氣仕り、兩三日の中には、御機嫌を伺ふやうに申居りました。

秀康

それは頂上ぢや。

(安居丸茶を捧ぐ、秀康取つて茶碗の熱きを覚え、物をも云はず突返す。安居丸その意を料りかねて迷倒す。

右京機到れりと思ひ立たむとせしが、忍びず。安居丸の袖を引き、温湯と代へむことを叫びて教ふ。安居丸急

ぎて下場。秀康はそ知らぬ面地にて花を眺めつつあり。安居丸恭しく茶碗を捧げて秀康に薦む。秀康取つて一

息に飲み終る。)

秀康

能い加減ぢや、右京其方の手で一服立てい。

右京

はつ。

(右京仰を受くるに忍びずして躊躇ふ。)

秀康 早うせい。

右京 はあ。

(右京是非無く茶碗を受けて奥へ入る。微風吹く。落花翩翩。やがて右京顔色蒼ざめ、茶碗を持ち来る。秀康訝かりて)

秀康 右京腹痛でも致すか。

右京 いえ。

秀康 額の色がよいぞ。

右京 はあ。

(と茶碗を差出す。秀康取つて服加減を試み、會心の思入にて飲み終り、右京を浸漫と見て)

秀康 右京今の茶は。

右京 えつ。

秀康 湯加減は如何致した。

右京 お熱いのを差上りました。

秀康 小姓共、皆も能う聞け、参りたての服は、加減の熱いに得飲まざりしを、右京が心付に温めて

おます。續いて所望致したれば、沸ぎる様なのを立て居つた。心を得たる右京かな、皆も彼の様に

心がけい。

(右京は慙愧の念に堪へざるさま。)

安居丸 そのままに御返しなされました、如何はせむと煩ひしを、右京の早速にて御機嫌に應ひました。

久市 私共も只今の御教訓は忘れませぬやう、確と心掛けまする。

秀康 睦まじい其方達心は何處までも美しく持て、偽り飾らぬを武士とはいふぞ、正直は武士の甲冑、

義と申すが心の大将、一面と腹と變はれる奴は、人非人と云ふぞよ。

(彼方にて「ならぬぞ、ならぬぞ」と言る聲す。)

秀康 何事ぢや、久市見て參れ。

久市 はい。

(久市下場。彼方には「おのれらが」「役者づれが」など以前より聲高に聞ゆ。久市引返して登場。)

久市 殿様申上げます、役者の山三が争ふてぢや。

秀康 なに山三が争ふ、何と申して争ふ。

久市 殿様に御目通したいといふ、ならぬと云ふ、それで争ふてござりまする。

秀康 予に逢ひたい、苦しくない花見の場、彼等なんぞを呼うでこそ興も多い、此方よりと思ふ程ぢや、

是れへ呼べ。

久市 はあ。

(久市下場、争ふ聲止む。久市名古屋山三を伴ひて上場。)

秀康 山三子に逢ひたいとは何ぢや。新作の歌舞伎でも出来たかの。

山三 御花見と承り、御目通を願ひましたに、狂言氣のない坊様たち、口を酸くして頼うでも、ならぬとのみで押返され聲高になりましたが、御耳に觸れました。

秀康 其方に似合しからぬ事ぞ。

山三 恐れ入りました。さて罷出ましたるは、一大事の儀にござりますれば、御人拂を願ひたう存じまする。

秀康 左様か、小姓共幸ひぢや、面面勝手に花を見い。

(二人の外一同下場。)

山三 一大事と申しまするは、この御文にござりまする。

(秀康山三より消息を受取りて披閱す。)

秀康 是れぞ速水甲斐より予に宛てたる消息、その使に山三とは。

山三 その文使ひになりましたは、先達で御誕生の御祝とて、御城内に召出されし刻、怪しい御人に出逢ひました。話の綾は定かならねど薬包を手渡しなしたる、相手は家老の土屋様、江戸方の大軍師

が、姿を變へて庭内の密密咄的といつば、恐れながら殿様御上と、思ふにつけて早速の計ひ、他家と云ひ條、豊臣家にては、頼りに思ふ越前様、折から歸る大阪の、御使者は元は知人なり、下り船に追付きて、事の仔細を打明けても、早速には御承引なく、漸う只今この消息を、頂きました幸先へ、御參詣とは御武運の、長久なるべき御仕合せ。

秀康 汝の言葉に相違はあるまひ、さりながら何故ありてさまでに、この秀康を心に掛くるぞ。

山三 それには二つの因由いひはの候ふ、一つには此山三、幼きときは豊臣家の祿米をもて生ひ立ち候ふ、また二つには藝道の、歌舞伎の爲めに殿様の、御無事を望み居りまする。

秀康 予を藝道の爲めとや。

山三 されば太夫が申しまするは、越前の殿様こそ藝道の守護神、厚うひかせられまする故、歌舞伎も追追取立てられます、拙き手節も心を入れさせ、御覽下さる御殿様、國の爲めには大檀那と喜ぶシテに連なる私、一座の者も一同に、殿様御繁昌を祈り居る次第にござりまする。

秀康 ははは、それだけの事で守護神か、弟の下知を受くる秀康、賞むるは歌舞伎の者どもばかりぢや。

山三 かくまで思ふ私達、何卒御身御大切に。

秀康 おう、おう、湯茶飲酒に心を付けいと申すよの。

山三 別けて彼人の由縁の御方には。

秀康 由縁……心得たぞ。

(秀康考ふるうち、胸痛の心地、寂しく笑ひに混らす。)

秀康 われも四邊を逍遙せむ、山三供せい。

(秀康山三と共に下場。奥の方より右京出でて主君の方を見送り)

右京

世にあり難き御慈み、深き情を逆事に、主の齡を縮めし某、昔を今に例なき鬼畜に劣りしうき身の果、御辨疏も得爲すして、その儘終る命の瀬戸際、武士らしき最期をと、思へど是も名に立つ業、犬の様に死ぬること、なかなか今の運命なるべし、南無や御佛、極樂世界は覺束なし、永く冥路にさまよふとも、御主に御託を云ひ得るやう、守らせたまへ御佛。

(右京舌を噛み切り舞臺より飛降る。鳩舞ひ立つ。花激しく散る「落ちた」落ちた」とわめく聲聞ゆ。驪上り來れる安居丸。)

安居丸

殿様、殿様。

(奥の方にて)

秀康

安居、何事ぢや。

(秀康山三を従へて出で来る。)

安居丸

右京が舞臺から落ちさせられた。

歌舞伎物語

秀康 なに右京が落ちた、早う呼び活けえ。

(安居丸下場。秀康續くを)

山三 御殿様、こりや御茶を參らせられたな。

(山三袖を控へる。)

秀康 むむ。

山三 落ちられたのでおさらうか。

(安居丸慌だしく上り來り)

安居丸 殿、右京は夥しう血を吐いてぢや。

秀康 舌を嚙んだか。

(花少しく散る。鳩啼く。)

秀康 花も散るわ、人間の命も散らう、一期の榮も今の嵐に、あたり櫻はあとも残さで、元の土へは歸り行くぞ、山三今より伏見へ歌舞伎を仕立てい。

山三 なに歌舞伎を御覽とや。

秀康 思ひ出に國が舞を見やうぞ。

山三 はつ、折角ながら國は戀病み。

秀康 なに。

山三 いや殿様の御召なら、死なうと太夫は参りませう。

—幕—

## 大詰 伏見城中能舞臺

普通の能舞臺、前幕と同じ日。

唄 「三河の國に差しかかる

こころも鄙路のおとろへや

夢の戀路とむすほるる

渡せる橋は五つ六つ

七つにあまる八つ橋や

(唄の半ばに、業平に扮せる山三郎、童に扮せる瓶江、使丁に扮せる傳介、登場す。業平床几に腰うちかけて  
懣ふ。童振り。)

歌舞伎物語



唄 童

いかに我が君

みそなはせ

あの澤間より生ひ出でて

今を盛りの時もよし

眉目よし、香好し、娘どき

(童納まる。仕丁振り。)

がいに咲いたは

唄 使丁

開いたは

はれやれ咲いた杜若

風が吹いてもつんとして

雨が降つてもしやんとして

色が深かう、おはすよの

(使丁納まる。中將振り。)

そやし立つれば中將も

花に見入らせたまひつつ

女唄

けにや月行き星行きて  
夏來にけらし八つ橋の

あらなつかしのかほよばな

(阿國の杜若の精登場。)

なうなう

しばし旅人よ

咲きたる花になどかさは

涙をそぎたまふぞや

(業平振り。)

人の心はよつの緒の

喜怒哀樂のさよごまに

かはれるまでと知りたまへ

(杜若の精振り。)

否とよ我れは天さがる

鄙人なれど、うつし世の

歌舞伎物語

調べは秘めて胸にあり

玉の小琴は草笛に

秋風樂は、松が枝の

たよりにつたふ、天の曲

(業平振り。)

さかしき賤の女よと

見遣り見かはす花あやめ

見れば見るほど似たけは心

(兩人納まる。童續きて住丁振り。)

あの聲音から眉目からが

よう人に似てさむらふぞ

さつても貴方に生き寫し

瓜をちぎつて並べても

これ程似たがあるべいか

(女振り。)

見しは夢かや忘れぬ  
その面影はさうそれよ  
徴されて登る雲のうへ  
袖をつらぬる卿相の  
中より立ちし夢の人  
樂の拍子に打ちつれて  
差手のしげき双の舞  
手と手の觸れて花となり  
目と目の合ひて火と燃ゆる  
簪の花の揺らぎては  
情の息をむねに聞く  
雲のびんづら亂れては  
思ひの色をあらはせり

(知らせなしに道具廻る。)

## 同 見所

能舞臺と對したる見所、金屏風にて圍ひたる中に、秀康は尊上に、左右に侍、小姓、侍女數人、此方には醫師今大路道三、藥箱を傍らに控へたり。始終囃子の音。道三は藥湯を調劑して、小姓を招きて薦めしむ。秀康取つて飲まんとして、痙攣起り茶椀を取落とす。道三これを見て立上り、手を取りて脈を試む。下手の襖を開きて、國家老本多伊豆守富正登場。この體を見て無言にて平伏す。

秀康 伊豆か、

伊豆 はつ。

秀康 別れになつたぞ。

伊豆 御心弱き仰せかな、いかでさることの。

秀康 いやいや、我が心より得たる病、骨の髓まで侵み透つた。

伊豆 御國表より只今上洛の某、御病氣と聞いて直ぐに參上。

（此時近侍の一人慌ただし氣に入り來りしが、秀康と伊豆との對話を見て差控へたり。）

秀康 なんぢや。

近侍 はつ、左馬之助唯今死去仕りました。

秀康 また親も失せたとな。

(伊豆守は近侍に)

伊豆 さまでの病氣とも承はらぬに、して如何様の最期を遂けたぞ。

近侍 吐血致して相果てたと申します。

秀康 (半ば獨語のやうに) 世渡りは旅路のさまざま、東南西北志すに任かせたり、我れは此方と思へども

人は彼方へ足を向けたり、走りし後は草の蔭野、冥途の道は賑ふのう。

伊豆 何とてかやうに心細き事のみ仰せあるやらむ、是もおん病のなす所か、御心確かに持たせたまへ。

秀康 伊豆、あれ見い彼方は舞の囃子、人の世に咲く物云ふ花を、現に見ては此世を去る、さりと人は榮華の極みぢや、さりながら、難波に生ふる蘆の若葉、あな心なの海士人は、月諸共に刈り取るならめ、秀康一日世にあれば、世は一日の義を繋ぐ、われ失するとき義は滅せむ、無道の譏りは不義の富貴と、共に東に流れ行かう、たゞそれ故に命が惜いぞ。

(病苦益す重る。)

秀康 伊豆、無い命が惜しいわ。

伊豆  
秀康

はあ、天運、天命、人の力は是れに盡きませう。  
天ぢや、運命ぢや、自然おのれに開らく花を見て、天あめの威光あやむに跪くより、技巧たくみに生ひし人間の、誇を天  
に引き較べうぞ。

(益す苦痛の氣味。知らせなしに道具廻る)

## 同 元の舞臺

業平と女と振り。

今は昔と繰りかへす

かへす返らぬ池浪に

似たりや似たり花菖蒲

(業平納めて、あとは女のみ振り。)

身は南海のつばくらめ

春を慕へる少女子ぞ

捨てよ、捨ててよ、後朝の  
はやうつり香はさめたらむ

ええ悪性の戀知らず

眉目も姿も同じとは

やはり元木が戀しかろ

新しいとや、古いとや

戀慕の花の狂ひ咲き

執心ここに愛着の

古へ人の乗りうつる

なうなつかしや我れはこれ

あかぬ別れを春日野に

浮名を留めし自らぞ

野草やぐさの花に精魂せいこんを

よせてここまで見えたり

(舞臺の下を駆け来る近侍)



近侍

舞もそれまで、殿様御臨終ぢや。

山三

や。

(舞臺の役者一同に驚く。近侍去る。阿國も取り亂さんとしたるを堪へて舞ひ續ける。地の謠も拍子も切れた

るに、阿國は拍子を踏んで自ら語ふ。)

阿國

亂れ亂れよ、我が戀は

それよ咲きたる杜若

(此邊より、しどろもどろに謠ひ出すものあり。)

唄

ただ一生に一度咲く

人をおもひし一念が

輪廻の浪にただよひて

邪姪の罪を受けなば受けよ

花に刻めるこの戀は

君とふたりに消ゆるとて

此世の春にとどまらむ

思ひ出多き戀をして

御身と我れとは老いせじな

うせじや、消えじ、後の世の

なからむまでも、戀は失せじ

(阿國舞ひ納め、拍子を踏むと倒るるに、舞臺の役者は驚きて介抱す。本多伊豆守は出で來り、この體を見る。)

山三 太夫、氣をしつかと持たれませ。

(阿國氣の付きたる様にて)

阿國 ああ、ああ。

山三 思ひがけなき御別れに、心を落とすも尤も千萬、さほどに氣分が悪しければ、御臨終と承はつたに、舞ひ續けては居られたぞ。

阿國 舞臺へ上がれば神への贅、一段終らぬそのうちは、人の戀では留められぬ。

(山三は伊豆守の立てるを見て)

山三 はつ御臨終をも憚らず、舞ひ續けましたる段、御見逃がしを願ひまする。

伊豆 職分ぢや、役者の藝は合戦の場、後へ引く方はない、歌舞伎なんぞと蔑みしが、武士も及ばぬ魂

ひは、まことに主君の最かせられたも道理かな、天下一人、我等も肖かりたいわい。

幕

大正十四年二月一日印刷  
 大正十五年八月一日再版  
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集  
 第三卷



著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

(非賣品)

松居松翁  
 高安月  
 山崎紫  
 伊原青々  
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

東京市下谷區二長町一番地

守岡功

東京市下谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番  
 振替東京五二二九八番